

第三章 返済の生涯

敏生の父は教職を退いた後、母方のおじが経営する建築会社、光智商会の番頭になったが、すべてに日本式が身についた教師上がりの番頭さんに、新しい政治環境の下で一変した実業界を乗り切る才覚はなかった。時期も悪い。光復後の台湾はようやく産業の草創期。うち続く不景気も災いした。敏生が高校二年の時、建築会社は経営不振で倒産。失業した父は不況の底で、職さがしにも窮する始末だったが、子供たちはそんな苦勞も知らず、すすくと育っていった。兄弟七人すべてに高等教育を受けさせるのは経済的にも並大抵のことではない。無理がたたったのだろう。林家の負債は、子供たちの成長とともに膨れ上っていった。

「何とかしなければ。」積もり積もった負債を前に、林家も手をこまねいていたわけではない。博愛路に店舗を借りて手作りの子供服を売ったこともある。開店当日は売り切れの盛況。だが、友情応援や義理のお客ばかりでは長続きしない。一ヶ月もすると商売は下り坂。あとは転げ落ちるばかりだった。

やはり慣れないことはやらない方がよい。仕入れ、品揃え、客筋に売り上げ。素人商売の悲しさで、自信の持てないまま、あたらし一等地の店構えが、賃貸料の重圧におしつぶされた形で閉店。結局、負債のうわ塗りであった。

敏生の父は気前のよい人で、金銭にはまったくこだわらない。とくに教職にあったときは月々の固定収入があったから、生活や子女の教育にかかる金には、ほとんど糸目をつけなかった。宝くじで特等二万円を当てた時などは、当時のステータスシンボル、一台八〇〇元の富士霸王自転車を、二人の息子と娘婿、それと自分のために、何の躊躇もなく四台まとめて買ってしまった。家の負債はすでに危機的様相を呈していたのに、である。二万円は偶然当てたものだが、金を落としたり、物を無くし

たりする方は、日常茶飯事だった。

日本時代の父親は押しも押されもせぬ模範教師だったが、どう鼻眞目に見ても「商才」があったとは言えない。

あれはまだ薬品の管制があった頃、友人からペニシリンを手に入れた父親は大喜び。なにしろ戦後の品不足で薬品の値段はうなぎのぼり。宝物のようにたんすにしまいこんで「今日はいくら明日はいくら」と皮算用。なかなか手放そうとしない。最高時は一億円にも跳ね上がったが、そのうちに管制が解けて値は暴落。一獲千金の夢は泡と消えた。

「お金にはだらしなかつたが、いちばん懐かしい。」と敏生は今でもよく父のことを思い出す。家の債務のほとんどを引き受けるはめになった彼だが、「何不自由なく大学まで行かせてもらった」恩に報いるのは当然。それになにより父の借りた金は、「家族みんなで使った金」だと、敏生は割り切っている。

弁護士収入は独立後一年で五、六千元になっていたが、月給袋はそのまま手をつけず母親に渡し、その中から小遣いを貰うようにしていた。

敏生が家の負債を知ったのはこの頃。きっかけは音響設備の購入だった。当時まだステレオは贅沢品。敏生は台大電機科の友人とステレオの共同製作を計画し、部品リストを作成。五、六千円の買い物になるので母親に相談した。小額ではないが、出せない金額ではないと思っていた敏生は、母親のはつきりしない応対に疑問を抱く。問い詰めるようにして敏生は、この時はじめて負債のことを知るのである。

両親とも教職を離れたあとは収入も不安定になり、子女の教育と結婚で多大の出費を重ね、林家の

家計はずっと赤字。台湾式の「頼母子講」で、借りられるだけの金を借りて支出に当てていたのである。

「一体いくら借りてるの？」。母親にも正確なところは分からない。

「恐ろしいのは利息。放っておいたら雪だるま式に膨れ上って、林家は永遠に借金地獄から抜け出せない。」と心配した敏生は、「林家の借金は兄弟みんなで分担するから。」と父に懇請。父はしぶしぶ借財の詳細を明らかにし、返済計画を兄弟たちに示した。永生、寅生、紀彦三兄弟は月収五千元を家計の維持に、敏生は毎月二万元を借金の返済に当てる。うまく行けば四年で完了の見込みだった。

しかし、この返済計画は少し甘かったようだ。返済してるうちに、八十万元近くにも膨れ上った負債の実態が現われてきた。毎月の利息だけで一万八千元。頼母子講の掛金に穴を開けたつけは、後々まで響いてくる。

そのころ敏生は、昼間は法廷、夜は訴状の準備に追われる多忙の日々。創業期の困難はまだ続いていたのである。ある日、出勤前だというのに父がひょっこり訪ねてきて、「午後までに五千元なんとかならないか？」ときまり悪そうに言って帰ったことがある。重苦しい気持を引きずって家を出た敏生は、自転車をこぎながら金策のことばかり考えていた。

法廷弁論は気が散ってしどろもどろ、相手はそれでも容赦なく迫ってくる。「覚えてろ！帰りにお前から金を借りてやる。」と心のなかで、妙に凄んで見せたりした。いつ爆発するか分からない。むしろしゃくしゃくした気持ちに、敏生は落ち着いて仕事ができなかった。何とか一息つけたい。唯一残っていた赤峰街の自宅を売って返済に当てたい、と父に申し出たのも、そんな気持からだった。日本時代に苦勞して手に入れた財産。父が応じるはずもなかった。敏生が嫁を貰うまでは、という気持もあつ

たようだ。

家を手放したのは敏生の結婚後。三十四坪の土地、二階建てと中二階のある家屋は三十八万元で売れた。負債総額を八十万元とすれば、残りは四十二万元。返済のことだけを考えると、これでだいぶ楽になったと言える。

ところが翌年、不動産が高騰。あと一年待っていれば良かったと敏生はほぞを噛む。金策に窮して気持の余裕がなかった。こういう時は運にも見放される。

借家さがしは大変だった。息子志剛、志青も生まれていたし、両親に兄一家、弟妹、共稼ぎの敏生夫婦にはベビーカーも必要だった。合わせて十六人。ようやくさがし当てた吉林路の家は、寝るスペースもままならない狭い家。綿密に引越し計画を練っていた林父も匙を投げた。家財道具はごそつと処分。新居の部屋割で敏生一家は二階道路脇の一室へ。外の喧騒は慣れるにしても、一つ壁を隔てて隣は両親の居間。壁には窓まで付いている。敏生一家のプライバシーは完璧にない。階段の下で寝起きすることになった弟紀彦も可愛そうだった。

敏生夫婦は共稼ぎで昼間は不在。夜はせまい部屋で、仕事、睡眠、育児を兼ねた。志青が夜泣きをする時などは、朝の早い夫人を気づかって敏生が子守役。どっこいしよとばかり床に座って、片足で志青のゆりかごを押しながら、事務所の宣伝文句を練ったりなどしていた。

一年半後、林父の姉から承德路の家の一階と三階を借り受け、口うるさい家主とも別れを告げた。居住空間にはやや余裕ができたが、相変わらずプライバシーはなかった。

敏生夫人は、こんな林家の境遇に理解を示していたし、もともと楽観的な彼女には、苦にする様子も見えなかったが、実家筋の親戚が来るときは少し気を揉んだ。「こんな暮らしを見たら、実家に何

を報告されるか分からない。」事は婚家と敏生の体面に関わるのである。敏生はしかし、「構わないさ。どうせ暫くのことなんだから。」といたって呑気だった。

このころ敏生は将来の国際業務に備え新聞広告で英語教師を募集。そこに現われたアメリカ人弁護士オルデンバーグが、借金返済で林家の恩人になろうとは。人の出会いとは不思議なものである。

事の起こりは台北大飯店の火事。犠牲者の中に一人日本人がいて、その家族が大使館を通じて敏生に賠償請求を依頼してきた。といってもホテル側に賠償能力はない。検証の結果、火災の原因はたばこの不始末。火元はベトナム戦争の休暇中、台湾に来ていた兵士と判明。「いつそのこと駐台米軍を訴えたら。」オルデンバーグはそう提案すると、自らも書類の作成など熱心に敏生を助けてくれた。米軍側は最終的に六十万元の補償に同意。敏生は犠牲者の家族から厚く感謝された。台湾側の犠牲者も、同じ手法で十万から二十万元という思いも寄らぬ高額な補償を受けて事件は落着。補償額の二割十二万を手に入れた敏生は、その中から二万元をオルデンバーグに、十万元を全額返済に当てた。負債は余すところ三十万ちよつと。

八十万と三十万の差は大きい。なにしろ敏生には月々二万元のノルマがあったのだから。特許業務専念で月八千元しか稼げなかった時でも、一万二千元を会社から借りて返済に当てたほどだ。

返済が峠を越したのは一九七〇年の初めあたり。「私一人の力じゃない。家族全員の努力の結果だ。多く稼いだ者が多く負担するのは当然。」と敏生は淡々と語るが、一九五八年から十二年間。さなきだに苦しい創業の時期に、負債の影はいつも付いて回った。そんな日々が「やっと」終わりを告げたのである。心中の安堵はいかばかりであったろう。

この年の末、かねてから不自由を察していたのだろう。母親が突然、敏生一家の別居を認めた。喜

んだのは敏生夫人。これで家族水入らず、夫婦と子供たちだけのプライバシーが手に入る。夢がかなったのである。

敏生一家は新生北路に二十六、七坪のマンションを借りた。自分のための寝室、そして客間。子供たちにも自分の部屋。夫人は一万数千円の豪華なソファアを中山北路で購入。新居の落成を祝った。この思い出深いソファアは、今でも大事に保存している。

十二年。生まれたばかりの赤ん坊も中学生になるほどの歳月だ。

家の負債は清算できたが、法律企業化の道を歩む敏生には、もう一つの「負からの人生」が始まろうとしていた。